

## Editor's Note

### 講評

今年度は、卒業論文を提出する資格をもつ研究室所属の学生数は5名でしたが、残念ながら次の4名のみの提出となりました。

羽野さんは、睡眠の質に及ぼす身体活動と不安傾向の影響を検討しました。20名の大学生参加者を対象にして、1週間にわたり毎日、活動量計で測定される歩数と消費カロリーを記録し、毎朝、OSA 睡眠調査票による睡眠の質をgoogle-form で回答させました。その結果、サンプル数の制約等により身体活動と睡眠との間には有意な関係は認められなかったものの、不安傾向が高いと起床時ストレスが高いことなどが示されました。実験遂行に必要な多くの困難な前提条件をクリアしてきちんとしたデータを収集できた点は高く評価されます。

緒方さんは、連続フラッシュ抑制法を用いて表情刺激を閾下呈示し表情処理過程を検討しました。その際、参加者の個人特性の一つである共感性が閾下の表情処理に及ぼす効果を見えています。その結果、多次元共感性尺度の自己指向的反応性因子得点が高いほど、プライム刺激表情が笑いもしくは無しの条件で標的刺激表情が怒り条件のとき処理速度が早いことが見られています。共感性と表情認知の関係を立証するためには高度な実験技術が求められます。そのこともあって、最終段階で実験方針の確定と実験プログラムの作成に時間がかかりましたが、この経験は今後の研究に活かしていける貴重なものとなったと思います。

高津さんは、幼稚園児を対象にして、他の子どもが対人葛藤場面におかれているとき、どのような慰め行動（共感的慰めなど他3タイプの内の）を起こすか、それが他者視点取得能力の発達とどのように関連しているかを検討しました。慰め方略の選択と他者視点取得との関係は参加者数の制約もあって、明確にはなりませんでしたが、しかし他者視点取得能力の有無と性差による影響は認められています。幼児を対象としたこの種の実験には、論文に記述されない微妙でしかし難度の高い実験技術が求められます。それらについてほぼ完璧な配慮が払われた本研究は後続の研究により指針を与えるものと評価できます。

生島さんは、プレ卒研究の結果を受けて人生目標と達成動機の関連を検討しました。人生目標は引き続きALGPSを用い、達成動機はAMS-Rを翻訳したものを用いています。その結果、達成欲求が高い人は、人生目標の重要性や達成可能性の認識を高めることが示されました。その結果、確立した死生観をもつことや高い達成動機をもつことは人生目標に対する認識を変化させ、生きがいをもって生きることにつながることを示されたと言えます。プレ卒、卒論を通して一貫してこのテーマを追求した研究努力の集大成として誇るべき成果が得られと思います。

本年度は、プレ卒論文としては次の5本が提出されました。

市川さんは、大学生を対象に養護性に及ぼす過去の被養護・養護体験の関連を検討しました。その結果、きょうだい内の地位（兄・姉・弟・妹）に関わらず「先生からの被養護体験」と「同性の親への評価」が養護性に影響を与えること、および女性のみにおいて「父親からの被養護体験」や「父親への評価」が養護性と負の相関を示すことなどを見出しています。擁護性という内包と外延が実証的に明確化していないテーマに取り組みながら一応の結果を得たことは評価されます。卒業研究に向けてテーマのいっそうの精緻化が期待されます。

須栗さんは、幼児を対象に「解は1つとは限らない」という結論を導く思考方略の発達について不定推論課題を用いて検討しました。不定推論課題には、カテゴリー条件文、義務条件文、因果条件文を、また同時に解課題も使用して「解は1つとは限らない」という理解があるのかを検討しました。その結果、すべての条件において対象児が「解は1つとは限らない」という思考方略を有していることは示されましたが、不定推論の条件ごとの加齢による発達の差を見ることはできませんでした。幼稚園児を対象としたこのタイプの研究には実験遂行上の非常な難しさがありますが、来年の卒業研究への道筋が見える地点まで進んだことは評価できます。

宮川さんは、幼児を対象にして、罪悪感の認識と感情的役割取得の関連を検討しました。年齢（学年）と罪悪感との関係および年齢（学年）と感情的役割取得能力の関係については、参加者数の限定もあり有意な差は見られませんでした。しかし、参加児を年中・年長という学年別ではなく、3ヶ月、4ヶ月、6ヶ月ごとに月齢に基づいてグループ分けし発達過程を分析したところ、すべての月齢グループ分けにおいて、感情的役割取得能力の発達差が有意となっています。幼稚園児におけるこれらの認知能力発達が年単位ではなく、比較的短期間に獲得され変化すること、発達初期の子

どもを対象とする研究では年齢（学年）に基づく参加者グルーピングに限界があることを示した点で発達研究一般に対して示唆の多い研究だと思います。

山上さんは、音楽聴取時の感情喚起について研究を進めました。その過程の中で GEMS(Zentner et al., 2008) に着目し、原著者からの日本語翻訳の許諾を得て、音楽聴取によって喚起される「高揚」感情を測定する尺度をパケットランレーションを行いつつ作成しました。また参加者に実際に音楽を聞かせて、その尺度を用いて感情喚起を調べ、尺度の妥当性などについて検討を加えています。GEMS を日本人参加者に適用したはじめての研究という側面だけでなく、実際の音楽聴取実験によって尺度の洗練化の手がかりを得た点が高く評価されます。

高橋さんは、大学生を対象にして対人コミュニケーション場面で重要な役割を果たす非言語行動と社会的スキルとの関係を検討しました。参加者を KISS-18 で測定された社会的スキルが高い群と低い群に分け、その後、高低を組み合わせた初対面同士の二人組みを作り、15 分間の自己紹介会話を行わせ行動観察をしました。会話中の非言語行動（相手への視線、うなずき、笑顔、ジェスチャー、アダプター）の分析から、社会的スキルの高低によって、初対面場面での初期と後期で非言語行動に違いがあることを見出しました。先行研究を精緻化し独創的な知見に到達したことは注目に値します。

今年度の卒論・プレ卒を以って、教師生活そして教員としての論文指導にピリオドを打ちます。大学院生時代あるいは助手時代も合わせる 45 年もの長きにわたる指導歴となりますが、ぼくの場合には「指導」というよりも、実際にはみなさんから色々教えて頂いたという側面が大きいと思います。このことは専修大学に入職して最初の一年目から感じていました。ぼくにとっての第一期生のみなさんの卒論をいま見返してみると、当時のそんな思いが昨日のことのように蘇ります。手探りというか五里霧中というか、おっかなびっくりというか恐怖というか、そんな思いの基底を流れる感情として、学生ってみんなすごい、という強い畏敬の念がありました。40 年も経った今年の卒論・プレ卒指導でも、第一期生の指導の時に抱いたこれらの感情が相変わらずぼくの胸の底にあることをしばしば感じていました。

みなさん、ありがとうございました。

（2019 年 3 月 15 日 山上 精次 ）